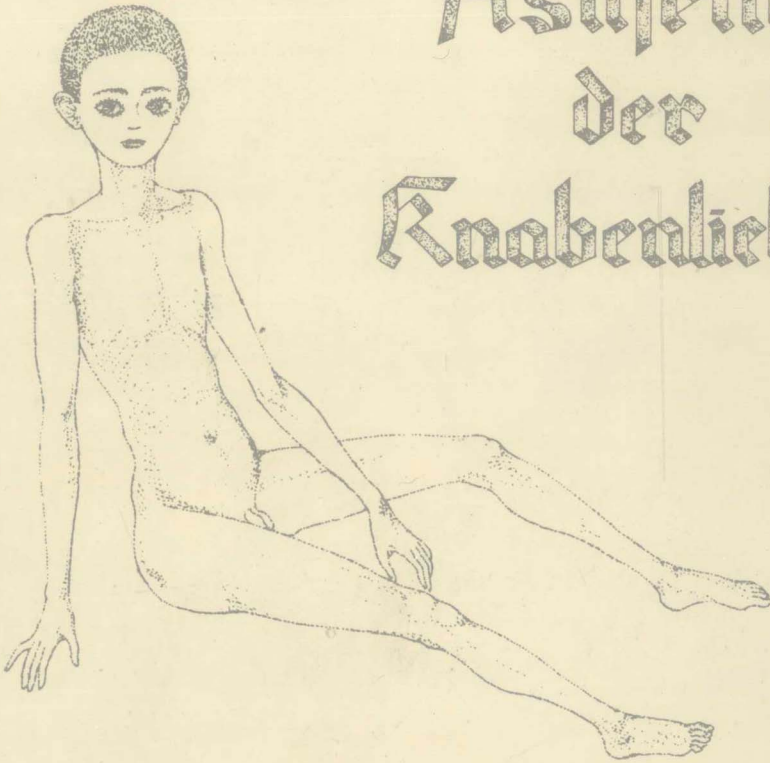


Ästhetik
der
Knabenliebe



von Tarupho Inagaki

Ästhetik der Knabenliebe

von *Tarupho Inagaki*

増補改訂 少年愛の美学

著者／稲垣足穂＊装幀・飾絵／亀山巖＊発行者／徳間康快

発行所／徳間書店／東京都港区新橋４の10の1

TEL／代表(433)6231＊振替／東京44392

印刷／図書印刷＊製本／大口製本

昭和43年５月10日第1版第1刷発行

昭和45年４月25日第2版第1刷発行

昭和51年４月10日第2版第4刷発行

© 1970



Ästhetik
der
Ambrosialiebe
von
Catepho Inagaki

増補改訂 少年愛の美学／目次

	はしがき	* 7
第 1 章	幼少年的ヒップナイド	* 13
第 2 章	A 感覚の抽象化	* 95
第 3 章	高野六十那智八十	* 199

	秋夜長物語	* 261
--	-------	-------

装幀・飾絵／亀山 巖

増補改訂 少年愛の美学

ラブレールについては、「大多数の人間が彼よりも低い水準にいたのでなければ、到底これ程の評判にはならなかったろう」という説があるそうだ。それは、渡辺一夫博士の訳をちょっと見ただけで、私にも頷かれた。

「パートンは、彼の英訳『千夜一夜』が物議をかもした時に云っている。そもそも『旧約聖書』と『千夜一夜』と、ラブレールとを以て、天下の三大猥褻書となすと」これは南方熊楠翁の話だから、南方流ユーモアかも知れないが、しかし、大ざっぱに云えばそうなのかも知れない。でもラブレールがどうしてアラビアンナイト級であろうか？ 凡そエロティシズム文学を書くに当っては、「時空の無限に関心を持つほどの心にあつては、その秘密な

片すみにセックスの道徳が組織されているものだ」こうでなければならぬ。そうなのに、フランソワ・ラブレールといえ、いかにも坊主上りの医者らしい、悪達者なボルノグラフィの作者で、ほとんど卑猥文学である。

——少年ガルガンチュワが、彼のお母さんの絹帽子やらハンカチやら、草の葉、藁屑、軟らかい鶯鳥の仔を用いてさえも、彼自身のお尻拭きをやってみて、それぞれの感覚効果についてお父さんに報告した。そういう箇所がラブレールの中にあることを草下英明君に教えられて、私には、かねて話に聞いていたフランス古典大家の真相が初めて見当づけられたのである。俗悪なお喋りに閉口しながらも、ともかく自分の研究に必要な部分を抽いて、先の論文中に使用した。

草下君は、幼年ガルガンチュワのお尻拭き実験を紹介したついでに、坐薬使用法について、彼の意見を述べた。あのカカオ脂を台にした挿入薬を「イチジクの実」に見立てて云うならば、一般に考えられるところとはあべこべに、尖った方をあとにした方が却ってうまく行くものだ。なるほど、銃弾的に持つて行けば、ゴム環のように内外二重になってあそこに嵌っている横紋筋の収縮力が、坐薬の円錐面を圧迫して、外側へへらせることにもなる。

此日どうしてこんな話題になったかと云うと、私は久しぶりに逢った草下君に向って、「君の痔の方は近ごろどうかね」とお見舞の言葉を述べたのだった。これがきつかけになって、客は、こちらは別に訊ねはしないのに、お湯屋の流し場における、彼の痒痒に對するガルガンチュワ的手当の件を持ち出して、「どうもあの時のA感覚には業を感じますね」などと洩らしたのである。

私も又、かねて創作の題名として思いついていた『痔の記憶』を以て、応酬した。たとえばムソルグスキーの組曲に『展覧会の絵』というのがある。ヘンリー・ジェームズの小説『ねじの廻転』も題名としては同じ系列だ。

ところで、日本人におなじみの痔疾について、僕にはどんな経験もない。ご当人はずいぶん辛くて憂鬱だそうであるが、でも痔というものは、淋病だの消渴だのに較べると、ずっと高尚で、ユーモラスな処があるのでないか。いまのスラヴ作曲家の楽譜は、亡友の画家ハルトマンの十種の絵を旋律化したのだとの話であるが、ジェームズの小説は、子供たちにだけそれが見えるという風変りな幽霊事件である。僕の『痔の記憶』にも、痔のことは何も出てこないが、そこがつまり僕自身の“The turn of the Screw”なのだ。

——たとえば謡曲の、『花月』を、君は知っているか？ これは、九州彦山の麓の左衛門というのが、一子花月を天狗にさらわれてから、出家して回国中に、京都の清水寺の境内で我子にめぐり逢う話である。弓矢を携えた喝食^{かつしき}すがたの花月がうたい出す詞につれて、彼が七ツの年に天狗に取られて遍歴した山々が、青いフィルムを繰るように覚束なく、しかもまざまざと展開する……これはどうか、これなら痔の記憶に加えてもよからう。

——ある紳士が、自室の壁面に嵌めこみの戸棚を作つて、そのガラスの内部に、いろんな浣腸道具を蒐集しているのはどうか。『悪霊』に登場するキリーロフ氏は、その内側に赤い天鵝絨を張ったチーク材製の手匣の中に、素晴らしいピストルを二挺、これに薬莢及び火薬をそえて所持して、その手入れを何よりの愉しみにしている。ちようどそのように、此処に各種の浣腸器を取り揃えて、拭いたり磨いたりしている人物がいて、彼は時に秘蔵品の中から幾本かを選び取つて、肩から掛けるようになった革ケースに入れ、反対側の肩先には大型魔法壘をつるして外出するが、何用があつて何処へ出掛けるのかについては、誰も知らない。婦人科用具のコレクションよりも、浣腸器蒐集の方が洒落ていると君は思わないか？ いったい「男の中の男」の証拠は、ペデラスティ乃至ソドミーに対する彼の反応の度合によつて示される。サド侯爵に依ると、ソドミーは父系的属性であつて、これはもともと「母性憎悪」及び「女を享楽の具に供しては不可ない」という悲願に生れている。それは母系的権力

と制度への反抗であり、同時に、永いあいだ犠牲になってきた父系のための復讐でもある。ソドミーは、彼にあつては、母胎内の窒息（女性的原理中の幽閉）からあまねく男性を解放する所以になっている。ダンディズムをエディボス複合の逆方向に認めるというのは、僕には賛成だ。何故ならば、A感覚はV感覚のように男性をして低下させない。墮落などという薄よごれた、女々しい概念は、そこには微塵もないからだ。

——ある大学図書館にそなえられた国語辞典の総てに互つて、特に「肛」の字だけに赤インキでアンダーラインされていることが、発見された。驚いて外国語辞典をしらべてみると、「肛」に相当する語がみんなそのようになっている。正門から走り出て、最寄りのブックストアに飛び込んで、棚から字引を抜いてみると、万事休す！ 姉妹校へ電話で問い合わせたところが、先方も既に赤ライン引きである。

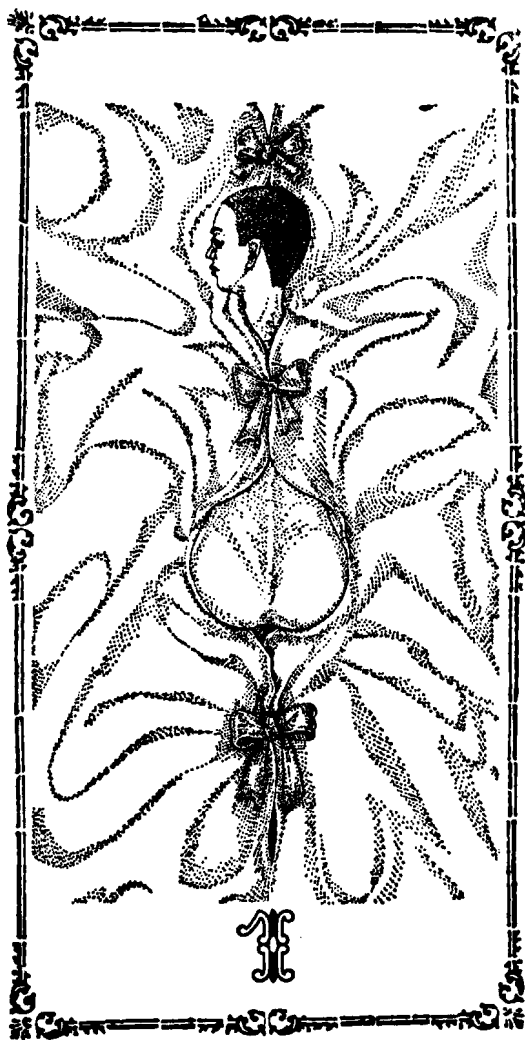
——ある大学教授が、時々思い出したように、彼のヒップポケットからハンカチを引張り出して、素早く顔を拭う様子が変わった。たまたま逸名氏から、「彼の所持するハンカチは悉く婦人の居敷当ての盗用である」との投書があった。なおそれに附記して、「同教授はそれら布きれを一枚ずつ呉服の包紙中に蔵し、表に、吉野花子様おん居敷当。竜田くれない嬢……。更級月代夫人……。越路雪枝女史……。等々と毛筆で記入して、うず高く自宅に隠匿しているが、別に「桃枕」と自ら命名する（その内部に何か仕掛があるらしい）ハート型ゴム製品の常用者でもある」云々。

草下君は眼をまんまるにして傾聴していたが、別に彼の見解は洩らさなかった。只帰りぎわに思い出したように、「浣腸マニア」というのがあるそうですよ」と云っただけである。私は、新聞の家庭相談欄などで見受けるお医者への回答を、思い合わした。「浣腸は癖になりますから、なるべく避けた方がよいでしょう」これは洗滌マニアを指すのだろう、とひとりぎめにした。「多くの母親はみだりに赤ん坊の世話を焼きすぎる結果、子供に性感

獲得の初期形態への強い執着を起させ、又、検温や浣腸を頻回行うことにより、肛門色情を亢進させることがある」先日、大阪少年鑑別所の若い医官から贈られた資料中に、私はそんなくたりを見付けた。しかしこのW・シュテッケル氏の言に引きずられたわけでない。また浣腸マニアにそそのかされたのでもなく、私は、「VでもPでもなくて、A相手が面白いのだな」とひとりごちた。

「想像力とは最も連結しがたいもの同士を繋ぐことを云い、意外とは、常に通俗性を打破するイロニーの一形式である」これは、三田文学に、西脇順三郎が載せたシュールレアリズムに関するエッセイ中に憶えている文句だ。自分に、『ヒップを主題とする奇想曲』が書けないものかしら？ ジッドが『コリドン』のために文壇的地位を失いかけたようなことこそ、まさに文学者の面目ではないか。サド侯の夥しい著作は、そのすべてが「それ自ら読まるるを好まぬ本」に属していた。即ち危険文書として永久に闇に葬られようがための情熱によって書かれたということを、銘記すべきである。「無限に意味深い作品とは、消滅すること——人間としての痕跡を残さず、雲霧消散してしまうことへの作者の欲望になるのではなからうか」(マルキ・ド・サド)

「何か他の点(たとえば社会的、倫理的な点)で精神的に異常な人はど性生活は規則的であり、他の点で並の人は性生活において異常なことが多い」とフロイトが云っている。私の今回の文章は前者のために書くのであるが、より多く後者の参考にならせたいとも願っている。それとも、主として後者のためにペンを執るが、前者に何事か寄与する処があればいい、と云い直した方が適当であろうか。



第一章 幼少年的ヒップナイド

洛東のさる名寺における春宵のつどいに、広間に伸べられた大幅な国宝絵巻物を前にして、お客様一同が吐息をついた。坊間の春本やヌード写真類が俄かに色褪せて、ごみ屑のようなものに一変してしまったからだ。

その巻物は、年のころ十四、五歳の藤たけた稚児が紋紗の水干の胸ひもを解き、指貫を脱ぎ棄てて行く処に始まっている。若草の匂いにする裸身が湯あみして、次にそこに用意された火桶に跨がることによって、下半身部が隅々まで暖められ、炷物たきもので薫じられる。いずれの場面も、白桃のようなお尻を見せたうしろ姿である。いよいよという処は、同じくスケッチ風の淡々とした筆致で、後朝きんぎょの和歌が添えられて終り！ 尤も原本はこういう挿